

丸倉 直美 先生



埼玉県立がんセンター

リエゾン精神看護専門看護師

市民公開シンポジウム

会場：大宮ソニックシティ 小ホール

時間：13時00分～14時50分

座長：岩田 敏弘 学会長

熊木 孝子 先生(埼玉県看護協会 会長)

ご略歴

鹿児島県生まれ。

大宮赤十字看護専門学校（現在のさいたま赤十字看護専門学校）卒業



平成2年	埼玉県立精神保健総合センター（現在の精神医療センター）に勤務 精神科急性期病棟、アルコール・薬物依存症病棟、身体疾患合併症病棟 などに12年勤務
平成14年4月	埼玉県立がんセンターへ異動 婦人科・泌尿器科病棟に5年間勤務
平成19年	広島赤十字看護大学編入学
平成21年	学士および保健師取得
平成21年4月	広島赤十字看護大学大学院に入学
平成23年	看護学研究科修士学取得
平成23年4月	埼玉県立がんセンターに就職。緩和ケア病棟に1年勤務
同年	精神看護専門看護師資格認定取得
平成24年4月	看護部所属のリエゾン精神看護専門看護師として勤務
～平成27年6月	
平成27年7月	現職 4階病棟で一看護師として勤務している
平成26年9月～	がん哲学外来・まちなかメディカルカフェ in さいたま代表 毎月1回がん哲学を志向する市民と協働しがんの悩みを持つ方との対 話の場作りをしている



がんを受け入れ、がんと向かい合う

～これまでに会った患者さんとの対話から思うこと～

がんという響きは、これまでにあった自身の健康や安心、安全な感覚を一気に吹き飛ばし、明日さえも不確実な心地に迫りやる力を持っています。そして現在もなお、死を強く連想させ、死生についていやおうなしに向き合わされる病の1つでもあります。

リエゾンナースとは、日本看護協会が認定する専門看護師というライセンスの1つです。この3年間看護部に所属し、こと医師や看護師が自分たちだけでは支えることが難しいと感じる死に直面した苦悩にある患者さんやご家族に対し、こころのケア担当の看護師として直接的なケアを提供すること、医療チームの困りごとへの相談を通して問題を分析し共に解決を図ること、倫理的な課題解決への支援といった活動をしてきました。

がんとなり、いのちに直結する課題を前にすると、人はまず無力であると強く思い知らされます。しかしながら、出会った方々から教わったのは、弱さも含めてやはり人はしなやかで強い存在であるということ。死生に向かい合うだけが技でもない。時には避けながら、ふと向き合わされ、その悩みや葛藤しつくした先にこそ見えてくる世界があり、そこに人は意味を見出してゆくようです。その時に大切な役割を果たすのが対話であり、またその場です。

今回はリエゾンナースの活動を通して出会った患者さんやご家族との対話から学び感じたこと、人が、そして対話が持つ力について共に想いを馳せる機会となれたら幸いです。



けん み たく や

賢見 卓也 先生

NPO法人

がんと暮らしを考える会

理事長



市民公開シンポジウム

会場：大宮ソニックシティ 小ホール

時間：13時00分～14時50分

座長：岩田 敏弘 学会長

熊木 孝子 先生(埼玉県看護協会 会長)

ご略歴

1999年 兵庫県立看護大学(現 兵庫県立大学看護学部)卒業

東京女子医大病院にて勤務後。

2006年 日本大学大学院にて経営学を学び、がん医療と生命保険の有効活用に関して研究。

2007年 訪問看護パリアンにて在宅ホスピス看護師として勤務しながら、

2011年 看護師・社会保険労務士・ファイナンシャルプランナー・税理士・弁護士らと共に『がん・生命保険・制度』を横断的に検討する研究会を立ち上げる。

2013年 がんの「お金」に関する制度をまとめて検索できるWEBサイト「がん制度ドック」の公開を機会に『NPO法人 がんと暮らしを考える会』として法人化。

現在 埼玉・千葉・兵庫・石川の病院・関連施設で「お金と仕事に関する個別相談会」に組織的に協力している。

昨日の備えを明日に活かす

～患者さんの仕事や家計を支えること～

一般的な日本人の備えとしては、次の3つが考えられる。年金や健康保険などの公的な制度、生命保険やがん保険など民間の金融商品、そして貯金や不動産などによる個人の備えである。病気や老後の備えとしては、海外と比較するとかなり重装備であると言われている。

にもかかわらず、がんに罹患した際に経済的な不安に直面してしまうのはなぜか。実はがんに罹患することによって、経済的な困りごとに直面したタイミングで適切な制度をタイミング良く受けることができるかは、自分で制度を理解し請求した書類を記載・提出しなければ制度を利用することができないからである。

申請主義と呼ばれるこの仕組みは、制度を利用できるタイミングであっても書類の提出がなければ制度が利用できない。以前は申請主義の弊害については、保険会社に対して向けられていたが、実は障害年金や税金の医療費控除、介護保険など公的なしくみでも同様のことが起こっている。そのため、多くの日本人は義務教育期間中に医療教育（がん教育）、制度教育、金融教育を受けていないにも関わらず、がんに罹患したときから初めて制度を調べ手続きの学習をすることとなる。

そのため私たちは、がんの種類や体調、雇用形態によって利用できる制度の洗い出しが簡単にできる web サイト「がん制度ドック」(<http://www.ganseido.com/>)を作成した。

実際にかかる医療費は高額療養費制度によって過剰に自己負担が増えることは抑えられている。医療費の平均は150万円/年以内で収まっている。問題は治療がはじまることによって収入が減少することである。がんと診断される前と後では約390万円/年であった収入が、約160万円に下がる（※1）というデータもある。

収入が下がることによって、これまでの生活水準を下げなければならないことやローンなどの定額の支出の負担感が増すことが、その不安を強くする。また、東京都の調査ではがん患者が仕事を続けたい理由として、「生計の維持」「働くことが生きがい」「治療代を賄う」が上位3項目であった。このため経済的な問題と仕事の継続は容易に分けて考えることができない。

さらに派遣・契約社員の増加、年金支給年齢が65歳まで引き上げられていること、1人暮らしの世帯の増加など社会的な支援が得られにくい状況に社会が変化している点も加味しなくてはならない。このような仕事や家計に関する問題はがん患者の「社会的苦痛」と言われ、がん医療が発展してきた一方で「社会的苦痛」に関しては解決すべき初歩的な問題がたくさんありまだ始まったばかりである。

※1 がん患者団体支援機構&ニッセンライフ共同実施 がん患者アンケート 2010.3

かつ また のり ゆき

勝俣 範之 先生



日本医科大学武蔵小杉病院

腫瘍内科教授・部長

外来化学療法室 室長

がん薬物療法専門医

市民公開シンポジウム

会場：大宮ソニックシティ 小ホール

時間：13時00分～14時50分

座長：岩田 敏弘 学会長

熊木 孝子 先生(埼玉県看護協会 会長)

ご略歴

- 1988年 富山医科薬科大学医学部医学科卒業 大隅鹿屋病院研修医
- 1989年 茅ヶ崎徳洲会病院 内科レジデント
- 1992年 国立がんセンター中央病院 内科レジデント
- 1997年 国立がんセンター中央病院 第一領域外来部 乳腺科医員
- 2003年 国立がんセンター中央病院 薬物療法部薬物療法室 医長
- 2004年 ハーバード大学 公衆衛生院 留学
- 2004年 国立がんセンター中央病院 第二通院治療センター 医長
- 2010年 国立がん研究センター中央病院 乳腺科・腫瘍内科外来 医長
- 2011年 現職

2011年10月より、20年間務めた国立がん研究センター中央病院を退職し、日本医科大学武蔵小杉病院で、腫瘍内科を立ち上げた。日本でまだ少ないがん薬物療法専門医・腫瘍内科医の一人。がんサバイバー支援にも積極的に取り組んでいて、正しいがん情報の普及を目指して、ブログ、ツイッター、フェイスブックを通し、情報発信している。

近著に「医療否定本の嘘」(扶桑社刊)、『「抗がん剤は効かない」の罪」(毎日新聞社刊)がある。

趣味：マラソン、ギター、ピアノ

医療はサポーター

～正しい医療を選ぶこと～

情報化社会となり、ちまたにはがん情報があふれ、患者さんにとっては、逆に正しい情報を得ることが難しい時代となってきました。中には、自由診療と称して、エビデンスのない怪しげな医療を施し、高額な医療費を請求する悪徳なクリニックも増えてきました。それによって、標準治療を拒否し、怪しげなクリニックで何百万円も費やしてしまう患者さんも少なくありません。

医療者側として、我々は常に正しい情報を発信していかなければなりません。また、患者さんが、正しく医療を受けられるために、患者さんのよきコーディネーターとなることも大切なことと思います。医師だけでなく、看護師、薬剤師、検査技師さんを含めたメディカルスタッフが患者さんの良き相談相手となり、患者さんを支えることができるような温かい医療が実現できることを願っています。

◇ 専門領域 ◇

内科腫瘍学全般 抗がん剤の支持療法 乳がん 婦人科がん化学療法
臨床試験 EBM がん患者とのコミュニケーション がんサバイバー支援など

◇ 所属学会 ◇

日本臨床腫瘍学会 日本癌学会 日本癌治療学会 日本内科学会
American Society of Clinical Oncology

◇ 著書など ◇

1. 勝俣範之 「医療否定本の嘘」 扶桑社 2015
2. 勝俣範之 「抗がん剤は効かないの罪」 毎日新聞社 2014
3. 勝俣範之他編集 「がん診療 UP TO DATE」 日経メディカル 2013
4. 勝俣範之（安藤正志、山本昇、濱口哲哉、金成元、向井博文共編）
「がん診療レジデントマニュアル第5版」 医学書院 2010年6月
5. 勝俣範之監訳 「がんサバイバー」 医学書院 2012